

査でより一層種類は増えることと思われるし、新知見の現われてくる可能性も多い(尤も面積から云えば三原郡・津名郡を合した所謂淡路島の面積は兵庫県全体の5.8%であるから、この点から見れば種類数は大変多いことになる)。

一般的には兵庫県内での南に位置している関係から北方系の種が少ないのは当然であるが、海浜性の甲虫類などは兵庫県の他の地がほとんど駄目になった現在大切に保護してやり度いものである。

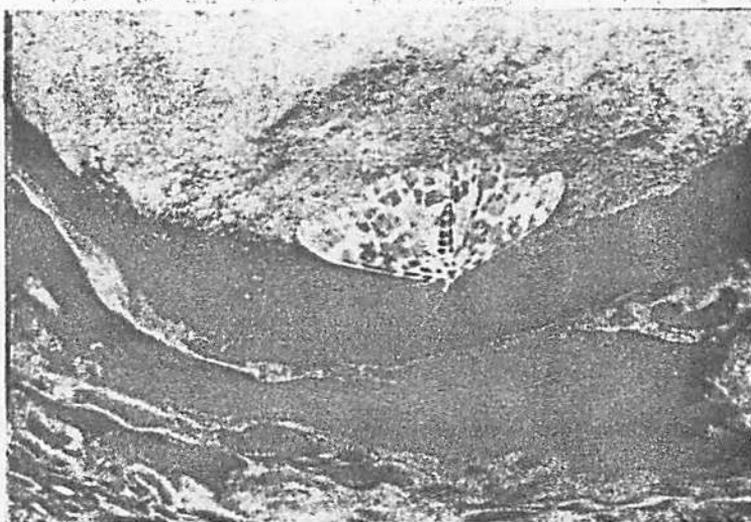
淡路島だけで知られている種が44種ある。中国地方から兵庫県下に点在的に分布しているアキオサムシを産したり、可成り変わった形態のセンチコガネがいたり、北方系のチャイロヒラタセスジムシを産したり等々この島の甲虫相は思ったより豊富である。ただ本四架橋とか島内縦貫道路の建設とか自然破壊的な計画が多くある。たゞ何んでも反対・反対ということではなく自然との調和を考えた計画の実施を切に望みたいものである。

(10 - IV - 1976)

## クロフオオシロエダシヤクの吸水について

登 日 邦 明

蛾類の吸水活動は、アメリカでは古くから興味深い観察が多くなされており、シヤクガの1種ヤカギバの1種が、夜間に水を呑んでは尻から出すという“pumping”活動などはよく知られているところであるが、本邦では一般的な吸水例もほとんど報告されておらず、2-3の例を知るのみである。



吸水するクロフオオシロエダシヤク *Pogonoprgia nigralbata nigralbata* Warren

筆者は、1976年5月9日に洲本市鮎屋・鮎尾ダム上流（通称 奥山待合）で、クロフオオシロエダシヤク *Pogonopygia nigralbata nigralbata* Warren の吸水活動を観察したので記録しておきたい。

この日は、柳高校生物部の合宿で、前日より部員5名と山崎俊道氏と共にこの地に来ていたのであるが、ベース・キャンプより奥へ10数分登った鮎屋川の源流が道を横切っている地点に差し掛った瞬間、斜め前方より中型の白っぽいシヤクガが飛来し、飛び石の1つに降りたのを目撃した。

目前の飛び石に降りたシヤクガは、数秒後には水が石に染みているところまで数センチ・メートル歩き、すぐ口吻を伸して吸水を開始した。近よってよく観察すると、この白っぽい中型のシヤクガは、クロフオオシロエダシヤク（雄）のやや古びた個体であった。吸水を始めたこの個体は、途中で何度か口吻を動かしていたが、大半は口吻を伸した状態で吸水を続け、約12分後に飛び去るまで同じ位置で吸水活動を続けた。

接写装置を持ち合わせていなかった筆者は、標準レンズで限界の35センチ・メートルの位置まで接近して写真を数枚写したが、水音のためか蛾は気付かずに吸水を続けた。

尚、当日の天候は晴れで日中は暖かであったが、“pumping” は観察できなかった。

#### 参 考 文 献

- 羽淵 彰 (1970) 夜間に吸水する蛾。佳香蝶 22(83):92.  
田中 蕃 (1971) 蛾の吸水について。—— 22(85):174-175.  
江島正郎 (1973) ウスアオシヤクの吸水。蛾類通信 (75):253.

#### 9 月にクロシオキシタバを採集

本年(1976年)9月12日の夕方、洲本市安乎町の筆者の自宅で壁に止まっていたクロシオキシタバ *Catocala kuangtungensis* Mell のほぼ完全なものを1頭採集した。なお本年8月11日にも同じ場所で本種を1頭採集したが、これまでに安乎町で採集している *Catocala* は、キシタバ *C. patala* C. et R. Felder とコガタキシタバ *C. praegnax* *esther* Butler だけで、クロシオキシタバは採集していなかった。 (堀田 久)